

2019年2月23日(土)

企画展「帝銀事件と登戸研究所」関連イベント

主催：明治大学平和教育登戸研究所資料館

特別プログラム
「帝銀事件 死刑囚」上映会

プログラム予定

13:00～15:00 「帝銀事件 死刑囚」上映会

15:00～15:10 休憩

15:10～(30～40分を予定) 山田 朗(館長・文学部教授)×渡辺 賢二(登戸研究所研究第一人者)
トークショー「帝銀事件と登戸研究所について ―登戸研究所員から語られた帝銀事件―」

※時間が若干前後する可能性がございます。 ※本日16:45まで資料館開館いたします。

※混雑が予想されますので、座席にお荷物などを置かないよう、譲り合ってお座りください。

※上映中は後方の出入口から入退室してください。

映画「帝銀事件 死刑囚」について

1964年公開。日活制作。社会派映画の巨匠、熊井啓の監督デビュー作。

現場の実地調査と関係者への取材を積み重ねて制作されたセミドキュメンタリードラマ。

帝国銀行椎名町支店の見取り図から忠実に事件現場が再現されています。

回想で登場する「第九陸軍技術研究所(登戸研究所)」のシーンは、1960年代の明治大学生田キャンパス内で撮影されました。「本物の」登戸研究所建造物が登場。必見です。

〈主要キャスト〉信欣三(平沢貞通)、内藤武敏(新聞記者)、笹森礼子(帝銀行員)、柳川慶子(平沢娘)、井上昭文(新聞記者)、草薙幸二郎(検事)、鈴木瑞穂(デスク)、北林谷栄(平沢妻)



「帝銀事件 死刑囚」より ©日活



1965年頃の明治大学生田キャンパス。

登戸研究所時代の建造物が、まだ数多く残っていた。

吉崎一郎氏撮影

映画「帝銀事件 死刑囚」 (日活、熊井啓監督、1964年)

に登場する 登戸研究所跡 = 明治大学生田キャンパス

撮影場所案内

★登戸研究所
関連史跡

35分30秒頃から
15秒間
お見逃しなく!

①「陸軍第九技術研究所」
の字幕が出るシーン

★ヒマラヤ杉&本館車寄せ

③サイドカー付バイク
が走るシーン

②「アセトン・シアン・ヒドリン」
の字幕が出るシーン
(後半の裁判シーンでも再登場)



映画で「陸軍第九技術研究所」として登場するのは、本物の「第九陸軍技術研究所 (通称 登戸研究所)」跡。現在 (撮影時も)、明治大学生田キャンパスとなっている、まさにこの場所で撮影されました。

至 生田駅 →

明治大学は1950年にこの土地を購入後も建物をそのまま利用し続けたため、映画が撮影された1960年代前半は登戸研究所の建物がほぼそのまま残されていました。映画が公開された1964年に工学部（現・理工学部）が移転してから次々と建て替えられますが、1990年代頃まではまだ何棟も残っていました。現在①に映っているヒマラヤ杉と車寄せ以外は面影がありませんが、道と区画は当時とあまり変わっていません。史跡と共に撮影場所も見てまわってください。

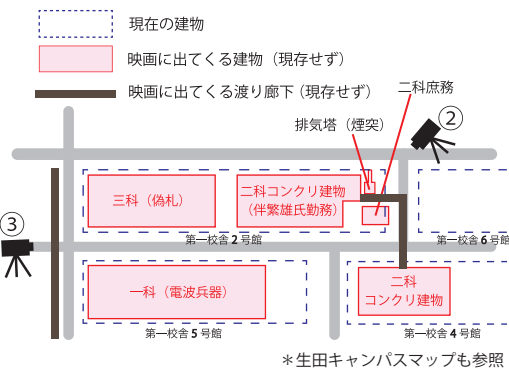
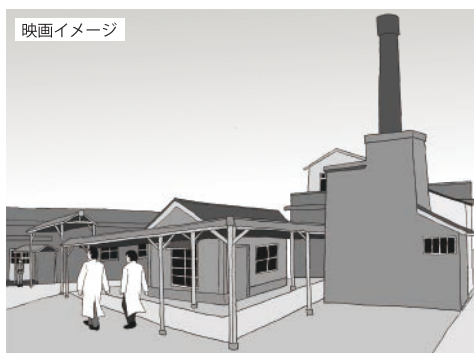
①「陸軍第九技術研究所」の字幕が出るシーン解説

登戸研究所本館前で撮影。本館は明治大学になってからも1992年に取り壊されるまで事務室や図書館として利用されていました。今でも本館前に植えられていたヒマラヤ杉と車寄せ前の丸い植え込みが残っています。



②「アセトン・シアン・ヒドリン」の字幕が出るシーン解説（後半の裁判シーンでも再登場）

毒物やスパイ用品を研究開発していた第二科が使っていた建物群です。右奥の屋上に木造家屋があるコンクリ建物は帝銀事件で毒物について証言をした伴繁雄氏が勤務していた建物。アセトン・シアン・ヒドリン（青酸ニトリール）もこの建物で作られていた？冒頭の煙突はこの建物に付随する排気塔です。真中の木造平屋は第二科の庶務。左奥に映っているコンクリ建物も第二科の建物でした（用途不明）。100棟以上の建物があった登戸研究所内でもコンクリ建物はわずかに数棟。コンクリ造の研究棟はこの2棟と現・資料館の計3棟だけで、全て第二科が使用していました。



③サイドカー付バイクが走るシーン解説

②の裏側の通りになります。手前左は偽札を作っていた第三科の建物。手前右が電波兵器や風船爆弾を開発していた第一科の建物で、この中で「<号兵器（殺人光線）」が開発されていました。左奥の、上に木造建築が乗ったコンクリ建物が伴繁雄氏がいた第二科の研究棟。中央奥に見える道を横切る渡り廊下が②の左奥に映っていた渡り廊下で、第二科コンクリ建物（用途不明）につながっていました。

